新たな教化方法の模索

（日蓮宗現代宗教研究所研究員）　川名湛忍

それではよろしくお願い致します。まず最初にお断りしておきますが、今回の私の発表は、標題にもありますように、新たな教化方法の模索なんてかっこいい言葉を使っていますけれども、実際は私自身の試行錯誤の様子を通して、自分自身にとっての永遠のテーマである、僧侶としてどうあるべきか、そのためにもいろいろなことをやりたいなという、実践報告のようなものであるということをご承知願います。ですからこれからお話することも、もう私は、そのことは済んでるよ、とか、もう既にやってるよという方も当然いらっしゃると思いますが、これから報告させていただきます。本題に入る前に、私がどんな人間かということを少し知っていただけたらと思いますので、まず最初に自己紹介のようなことをさせていただきます。私は昭和二十三年、東京都大田区大森で生まれました。今話題になっています団塊世代の中心的存在です。小中学校は地元の公立校でした。家の近くに平和島という島がありました。そこは戦争中には、米軍の捕虜収容所があったんだそうです。ですから私が小学生の頃までは、家の近所にはカマボコ兵舎があって進駐軍がいました。ですから、外人さんイコール進駐軍というような感覚がいまだに残っています。また昭和三十年が小学校入学なんですが、羽田空港がすぐそばにありまして、高度成長期の始まりでしたので、飛行機がどんどん増えてきて、そのために、私の小学校が都内で初めての防音装置造りになった校舎だったんです。まあ、そんなにすごいものではないのですが、要するに窓が二重になっていまして、間に空気の層がある形でした。飛行機がひっきりなしに飛ぶものですから、もう窓を閉め切らないと授業なんかできなかった状態でした。中学は一

クラス五十五名ずつの一学年十三クラスというマンモス校でした。高校は当時は池袋にありました芝浦工業大学付属高校でした。今は板橋に移っています。その当時といえばなんといってもビートルズでした。私もバンド活動と、麻雀と、ボーリングに熱中しておりました。その学校で生涯の師と生涯の友に出会うことができました。私が高校二年の時に、父が五十五歳で他界しました。そんな事情を知って恩師が、私の大学受験の時に神奈川大学の給費生試験の受験を進めてくれました。そのときの私の大学受験選択肢には神奈川大学は微塵もなかったんですけども、模擬試験を受けるような気持ちで受験したところ、運良く合格しましたので、まったく考えていませんでした神奈川大学の工学部建築学科に入学しました。何故今こんな話をするかというと、この大学進学が今に直結しているからなのです。それは、大学卒業後就職したのが大学の先輩がいる新橋の設備設計事務所でした。そしてそこに勤めていたのが今の妻なのです。その彼女が、実は現在現宗研の顧問でもある、立正大学教授の仲澤浩祐師の妹でした。ですからもし高校時代の恩師が神奈川大学を紹介してくれなかったら、まず間違いなく私はここにはいなかったということです。その先生とは今もお付き合いがありまして、昨年はお住まいの仙台からはるばる山梨まで来てくださって、一晩、もう一人の仲間と一緒に飲んで語り明かしました。このような今につながる貴重なものを、この高校時代にいただきました。

昭和四十六年から五十三年までは新橋にありました設備設計事務所に勤務しておりました。残業時間が月に一〇〇時間を超えるような忙しさでしたが、その中で心身の不調があらわれてきました。病院へ行って検査を受けても原因はわかりませんでした。有効な手だてが見つからないまま出した結論が、会社を辞め夫婦で商売を始めることでした。乏しい資金では都内での開業は無理だと判断し、妻の兄、姉、親類をたより、山梨県甲府市で喫茶店を開業しました。昭和五三年十二月でした。初めのうちは商売も軌道に乗り、体調も良くなったのですが、次第に商売が下降気味となり、それに従い体調も悪化し、店を続けることができなくなり、救いを求めてひたすら手をあわせました。幸

い仏縁をいただき、前総長、岩間湛正上人の弟子として得度出家させていただき、昌福寺で修行生活がはじまりました。昭和六十二年七月でした。体調不安を抱えたまま、わからないことの連続の中、必死の毎日でした。その間、師匠からはもちろんのこと、その上師僧のお父上でもある身延山九十世岩間法主さまからもご教授いただきました。正直その当時はこのことのすごさがわからず、年が経ち徐々に気がつくようになりました。足かけ十四年、昌福寺でお世話になり、平成十二年に今のお寺に縁をいただき現在に至っております。

そして、こんな私が次に紹介しますように、社員研修道場を担当させていただきました。それまでの経過をまずご説明いたしますが、対象となりました会社は株式会社アーキ・ピーアンドシー、Archi Planner Constructor という略なんだそうですけども、ここは建築積算業務、要するに設計図面から工事費を算出するんです。そしてここの佐藤という社長が私の高校時代の同級生でして、彼は芝浦工業大学建築科を卒業して、日産建設に就職してから、昭和五十八年にこの事務所を立ち上げた人物なんです。その彼が言うには、仕事のほとんどはコンピューター操作だそうです。ですから、社員たちは一日中コンピュータ画面の前に座って仕事をしていて、社員同士の連絡のやりとりもほとんどをメールで済ましてしまい直接会話をすることがとても少ないのだということでした。しかしミスをチェックするためにはチームワークが非常に必要な仕事だからだと、そのチームワークを植え付けるために、社内の一体感が欲しいということで、彼は野球部だったものですから、野球チームを作ったり、また横浜で行われている駅伝大会に出場したり、あと横浜の港でおこなわれている舟のレースにも参加をしたり、とにかく何とかして一体感が欲しいということで、様々な努力をしているんです。それで私に対しても数年前から、社員研修をして欲しいということを言われてました。毎年、もうできるだろう、できるだろうと催促され続け、やっと昨年に入ってから、それじゃやらせてもらおうかな、ということで準備を始め、十一月に実現の運びになりました。

内容については全部私に任せてもらえるということでしたが、ただ目的としては社員の一体感、社員の意識高揚の

ためということでした。そして会社の年中行事にしたいんだといい、こういうことをやっている会社だということが社員募集のための目玉の一つになるという話でした。当初、会場として自坊でやろうと思ったんですけども、現在三十人ほど社員のいる会社で、半数くらいずつ行かせたいということになりましたので、それではちょっとうちのお寺では無理だからということになり、新たな会場を考えましたところ、身延山の檀信徒研修道場が借りられるということでした。以前にも宗務所の行事では何回も利用してたんですけども、個人的にも借りられることを初めて知り、身延山檀信徒研修道場を一泊二日でお借りすることとしました。

参加者は社内で希望を募り、今回は男性ばかり十六名でした。その参加者の年代別は、五十代が五名、三十代が五名、二十代が六名でした。研修のテーマ、狙いとしましては、先ほども申し上げました会社としての要望、つまり一体感とか意識高揚、それを踏まえつつ、仏教思想を分かりやすく伝えるということです。特に、私が今回の研修のキーワードにしようとしたのが、「おかげさま」と「もったいない」でした。そして参加者が自分自身の生き方を見つめ直すきっかけになって欲しい、という思いで研修を組み立てました。資料として研修の予定表がお手元に行ってるはずですが、こんなにできるのかなと自分でも思いながら、目一杯の予定を立てました。一時間から一時間半の講話を、一日目に三回、二日目に一回の計四回を予定しました。その間に、菩提梯への登詣を入れ、それから唱題行も行うこととしました。お題目とはほとんど縁のない人ばかりですが、それでもやはり身延山でやらせていただくことだし、私の日蓮宗の僧侶としての基本ですから、唱題行も入れました。それからもう一つ迷ったのが、二日目に予定した写経でした。ほとんど全員普段筆を持ったことのないような人ですので、一般的な方法では無理かと考え、日蓮宗新聞社から出ている、練習用の薄墨の文字をなぞれるお手本を使用しました。

次に実際の研修内容について触れさせていただきます。お手元の五番目の資料は講義内容の要点をまとめたものですけど、追加資料として、当日参加者に配ったレジュメと同じものをご用意させていただきました。これをご説明し

ながら、どんなことをしたかということを述べさせていただきます。まず一日目の第一回目講話では、基本的な内容として、仏教ということと、お釈迦様と、それから法華経、ということについて、お話をさせていただきました。要するに仏教というのは、オカルトの世界ではなくて、非常に論理的な教えなんだということを自分では強調したつもりです。次の法華経については、ちょうどその年の三月に、インド旅行に参加させていただき、霊鷲山にも登らせていただいたものですから、そのときの様子を交えながら、簡単にですけど、法華経の話もいたしました。泥水の中でも美しい花を咲かせる蓮華のように、人間は煩悩を持ったまま悟りの花を咲かせることができるんですよ、という、これが教えの中心なんです、というようなことを説明させていただきました。その他には、仏教の基本理念としまして、プリントにもありますように、無常、無我、縁起、四苦八苦、煩悩、涅槃寂静の六項目について説明しました。実は涅槃寂静はちょっと難しいかなと思ったんですけども、三宝印につなげるために加えました。私の中では、縁起の考え方が、人間として生きるのに一番素晴らしい考え方だと思ってますので、如何に縁起を分かりやすく伝えるかというのが、私にとってのテーマでした。それが「おかげさま」「もったいない」につながると考え、縁起についてを詳しく説明させてもらいました。無常については、どうしても一般の方は、ムジョウという言葉は知っていてもほとんどは、りっしんべんの、無情、の印象でマイナスイメージしかないと思います。ですからそれに対しては、無常とはマイナスイメージではなくて、それはプラスでもなしマイナスでもなし、物事は必ず移りゆくという、その真理のことなんですよ、ということをいろんな例を引いて、話をさせていただきました。それから無我につなげ、始めから決まっているものはないんですよ、ということから無我を説明しそして縁起へ結びつけました。また四苦八苦も、縁起の考え方につながるんですけども、参加者のレジュメにもありますように、苦しみとは、こうありたいと求めながら思うようにならないことにより起こるもの、その原因が、取り除かれることによって消滅する苦しみもあるが、取り除くことができない原因によるものが四苦八苦なんですよ、ということを基本に、詳しく説明しました。ではど

うして思い通りにならないかというのは、結局、全てのものが関わり合ってる縁起の法則で、物事が成り立っているから、自分一人の力や、自分一人の考えではどうにもならなくて当たり前でしょという言い方で説明しました。その原因を取り除くことができない苦を、なおもそれを取り除こう、思い通りにしようとすることが、それが、苦になるんだと、ですから四苦八苦とは、これが苦しいことの代表なのではなくて、思う通りにしようとすると、苦になってしまうんですよと。煩悩、涅槃寂静は、煩悩は三毒につなげて話をさせていただき、涅槃寂静のほうは、普遍的な教えを悟り、知恵と慈悲を備え、真実の幸福と平安を求め実現した境地、ということで、説明するんですけども、なかなか具体的には、一般の方には分かってもらえないと思いましたので、私が強調したのは、慈悲の悲のほうでした。慈のほうは、みんなを励ましたりとか、一緒に喜んだりというのは比較的できると思いますが、悲のほうの、一緒に同じ気持ちになって悲しむ、悲しみに寄り添ってあげるということはなかなか、難しいんではないかと、でもそれが、ことに現代では、その悲が非常に足りないんではないか、それが、今のとんでもないような、考えられないような事件が多発、頻発してる大きな要素の一つではないのかという持論を述べました。同時に生き甲斐ということでお話をしたのが、人間とは、自分の生きてる意味を問い続ける生き物であり、そのためには科学、経済だけでは片手落ちとなり、行動の規範として、宗教の考え方が必要なんです、ということを強調しました。二回目の講話としては少し身近な話をと思いまして、「暮らしの中の仏教語」ということで、これは自分の寺のお彼岸の講話にずっとシリーズでやってきましたものの中から代表的なもの、差別、挨拶、リヤク（利益）、利益ですね、そして菩提、これは菩提梯に登ってもらうので、その前に菩提という話から菩提梯の説明をしました。皆さんもご存知と思いますが、佐渡の仁蔵の話をいたしました。この話は岩間法主さまの法話集「光明苑」からの引用です。その説明をした後に、菩提梯をみんなで登ってもらいました。

順序が逆になりましたが、仏教用語の説明でまずは差別、シャベツです。今の時代は、いわゆる悪差別、悪平等、

とくに悪平等が多いんではないかと思っているので、仏教で言う差別は、差別ではなくて区別なんですよと、でも今の世の中は何もかも区別がなくなっちゃってる、このことは若い人に限らず、いい年した人もその区別が分からなくなっていまっている。それは、判断基準がしっかりしてないからではないか、と話しました。この判断基準をしっかりするために仏教の考え方を勉強する必要があるのだと付け加えたのは言うまでもありません。次が挨拶です。これも挨拶というのは心を開くことなんですよ、というお話をしましたら、最後に書いてもらった管理職の方の感想文に、帰ってからは「挨拶」を会社のキーワードにするとありました。佐藤社長が言うには、社員の中には一日に一言も喋らないで帰ってしまうことがあるのだそうです。そんな話もあったので、挨拶という言葉を入れました。そしてさきほど申し上げましたように、この講話の後みんなで菩提梯を登りました。これも、どうかなと思ったのですが、気分転換も兼ねて登ってもらいましたところ全員が登りきり、大本堂前の記念写真では、みな晴れやかな表情をしていました。夕食は五時からと決められてます。たぶん参加者は自分達の生活で五時に夕飯を食べるなんてことは、ほとんどあり得ないと思います。それと「食法」を唱えたり、食事中は私語禁止など、食事そのものも修行のような体験だったろうと思います。

六時から第三回目の講話をしました。この三回目は、唱題行につなげなければならないので、お題目についての簡単な説明と、唱題行についてということよりも、大きな声を出すということがどんなに素晴らしいかということを伝えました。最初に、このレジュメにもありましたように、唱題行というのは要するに、お釈迦様の、悟りの根本を表す経典、妙法蓮華経に帰依、お任せすることを意味して、南無妙法蓮華経と、声を出して唱えることにより、心身を調え、禅定を得るのだと、一応、私なりの定義を説明しました。心身の調えというのは三調ですね、身体と息と心、調身調息調心ですね、この三調についての話をしました。それと、深呼吸でも、皆さん深呼吸というとまず一生懸命吸うんですね、そうじゃないんですよと、出産直後の赤ん坊を例にあげて、まず全部吐き出さないと新しいものが

入ってこないんだから、吐くことのほうが大切だと話しました。講話の後に、発声練習としてとにかく大きな声を出すように指導してから、講堂に移動しました。講堂のご本尊の前で、合掌、礼拝の説明をして、正しい形を知ってもらい、勤行に入りました。前もって渡しておいたお経本で開経偈、方便品、自我偈を読み、浄心行から唱題行へと進めました。思っていた以上に、素直に、真剣にやってくれたのはありがたかったです。最後の入浴で一日目のすべての予定が無事終わり、これも普段では考えられない、九時半の消灯を迎えました。

つづいて二日目です。研修道場を借りるには、本山の朝勤に出ることが条件の一つなのです。五時起床で、五時半に道場を出発して、夜明け前の真っ暗な道を歩き、寒さの中六時からの朝勤に参加しました。私の想像ではとても最後までは無理だろうと思っていました。足は崩してもいいから、姿勢だけはよくしてほしいとだけ注意してみなの様子を見ていました。十五分ぐらいしたら抜けて出るつもりでいたのですが、ほとんど動かずに真剣に見ているんです。そわそわして、まだいるのかな、というような顔をしてる人がいないので、こりゃいいかな、もうちょっと続くかな、と思っているうちに最後まで続いてしまいました。すると最後に、その日のお導師でした久住布教部長さんが最後のご挨拶の中で、今日ここに善国寺さんが引率した、社員研修道場のアーキ・ピーアンドシーの社員の方々が来ています、というような話をしてくれたんですね。それを参加者達が聞いていましたから、みんな感激してくれちゃいまして（笑）、この朝勤参加は大成功でした。十一月の二十六日ですから、この時期の五時、五時半ですので真っ暗ですね。真っ暗な川沿いの道を上がって本山まで行きました。そして足が痛いのを我慢して、一生懸命耐えて、朝勤が終わって外へ出ましたら、すっかり明るくなっていて、その日は快晴の空でした。それにとても感激したと、参加者たちが口をそろえていました。帰り道の紅葉を楽しみながら笑顔で歩きながら道場にもどり、講堂で朝勤を行い待望の朝食となりました。

二日目の最初は第四回目の講話だったのですけが、仏教の考え方をそれぞれの仕事、人生に生かして欲しい、とい

うことで、今回のキーワードとしました、おかげさま、もったいない、それに会社や仕事、ストレス、社会、ということについて、項目別に説明というか、話をさせていただきました。これらの話で私が一番言いたかったのは、現代の人に欠けていることとして、「畏れ」があるのではないかと思っているんです。畏敬の畏です。物を無駄にしてもったいない、勿論それも大切なんですけども、「いやそんな、畏れ多いことを」という言い方のような、そういう畏れなんです。先人たちは、こんなことしていたらご先祖さんに合わす顔がないなとか、神様仏様に、あるいはお天道様に申し訳ないな、というような言い方をしましたよね、そういう考えが今の人たちには欠けているのではないか、それが一番重要なのではないのかと思っていますので、この「畏れ」ということを言いたいがために、おかげさまと、もったいないを、キーワードとして話させていただきました。その根本の考え方として、何故そうなるのかというのは、やはり縁起につながるのだと私は思っておりますので、大きな関わりの中で生かされているのだから、自分の思う通りにはいかないんですよと。エコロジーという、生態学というのも結局そういうことを、科学的に研究しているのだと感じています。また罰が当たるというような感覚が大切なんではないかということも、同時に話しました。それとやはり社員研修ですから、会社や仕事のことにつながる話が大切ですので、我々僧侶の基本である給仕、仕えるということについて話をしました。続いてはストレスでした。ストレスの定義は、こうでなければならないという自分と、現実の自分とのギャップです。それぞれ自分は、こうありたいとか、これだけやったんだからこういう結果が出るはずだとかいう、自分で持ってるイメージと、目の前の現実との間にギャップがあると、それがストレスになるんだと。ではそのギャップを埋めるためにはどうしたらいいかというと、現実を自分の理想なり、自分の思っている所に近づけようという努力をするんですが、でも結局それは簡単には近づかない、近づいたなと思うと今度は自分の理想のほうが先に行ってしまう。ですから、それはできないことなんではないか、それよりも、自分の未熟さの自覚を持つことによって初めて、人生修養の旅を始めることができるんだと、そしてこれは感謝につながるという

こと。そして、感謝の謝という字はごんべん(言)に身のたけ(寸・丈)と書くんですね。だから我々が今、身の丈を越えた生活をしているので、それで感謝が足らなくなってきてるのではないかと。話がそれるかも知れませんが、今日宗務院に来る時に乗ったタクシーで、ラジオを聞いていましたらある先生が、「現代の一年は、地球の歴史からいうと、十万年にあたる変化をしているのです」と言っていました。ですからアナウンサーの「百年先地球はどうなっていますか」という質問に「百年先ということは、一千万年分の地球の変化なのだから、とても私にはわからないです」と答えていましたけども、これなんかも、ほんとに身の丈を越えた、人間の個々の力をはるかに越えた変化の中にいるということですから、いろんな想像を超える不都合が出てきてもしょうがないのかも知れません。

最後の社会では、自由と共生について話しました。そのときはまだ現宗研に仲間入りさせていただく前でしたが、中央教研のテーマで共生についてやるとは、その時はもちろん思ってもいませんでした。ただ、私がイメージしていた共生というのは、共業(くごう)ということでした。それは、我々の社会は我々の業が集まってできているのですから、時代が悪い、社会が悪いといっても、それは、やはり一人ひとりの、悪い業が集まれば悪い社会になるのは当たり前であり、善い業が集まれば善い社会になるはずだから、結局は個人の問題になる。これは会社でも同じではないか、というようなことで、特に先ほどの慈悲の悲の話と同じように、レジュメでは、共に生きるためには、共に苦しむ覚悟を持たなければならないんだと書きました。社会は一人ひとりの業、行いの影響力が集まってできあがり、その社会が、個の存在を可能にしてるんだというような定義で話を進めました。そして最後に宮沢賢治さんの「社会全体が幸せにならない限り個人の幸せはない」という、こういう考え方が大切なんではないかということでまとめました。講話はここまでで、その後、今度は写経を行いました。はじめに写経の心得について説明しました。それは「一一文文是真佛」なのだから一文字一文字を丁寧に書くことが肝心だということ。それと願文の説明もし、いくつか例を示して、写経の最後に自分の思いを書いてくださいということで始めてもらいました。ただいきなり用紙に書

き始めるのは無理ではないかと思い、下書き用の紙に筆の動きの練習として、たて、よこ、ななめの線を書いてみるように指示しました。予定時間を大幅にオーバーして、昼食を遅らせてまでのがんばりで、全員最後まで書き上げました。それらを閉講式のなかで、願文の祈願回向をして締めくくりといたしました。

これが全体の研修の流れでしたが、今回の研修の総括として、プリントの三枚目の七番にまとめましたので読ませていただきます。私自身にとっても、友人の会社としても初めての試みではあったが、今回の研修道場でそれぞれが意図したものは、社長自身の感想文にあったように、チームワークが欠かせない仕事の性格上、社員同士の仲間意識の必要性を求め、脱日常の環境に身を置き、共通の体験を通して一体感を持たせることであった。教化側、ちょっと生意気な言葉ですけど私の立場としましては、そのための脱日常環境を用意して、その中で私自身の体験から学んだ、仏教思想を基本とした考え方、生き方を伝えることを中心としたカリキュラムを組み、それに加えて唱題行、大本堂朝勤参詣、写経など、その心身両面の脱日常体験により、研修参加者にそれまでの自分のものとは違う判断基準、価値観を学んでほしいことであった。一泊二日の研修実施中に感じたことは、会社の業務命令の一つであるとしても、参加者の真剣な受講態度には新鮮な感動を得ました。特に写経において、予定した時間内では全員完成に至らず、しばらく様子を見ていると誰一人やめる気配が見えず、結局昼食が一時間近く遅れることになりましたが、全員が最後まで書き上げました。その根気には少々驚かされましたが、積算という細かく積み上げてゆく仕事の性格上、必須の要素が証明されたことでもあるのではないかなと感じました。講義内容としては、不十分であることは承知の上ですが、受講者が新鮮な印象を持ってくれたことは確かであり、これは現代人が年齢問わずに、余りにも仏教的な考え方とかけ離れた所で生活しているためであろうと想像できる。友人の会社に限らず、組織として社員の人格向上のために研修を受けたいというニーズはかなりあるようで、それらを宗教者が受け入れることは十分可能であり、勿論もうやられている方もいらっしゃると思いますが、そのことが私達が目指す、仏種を蒔くことにつながるはずです

が、しかしながら現状では、まず人々の心を耕すことが急務ではないかと感じています。いくら種を蒔いても、コンクリートの上に蒔いたんじゃ芽が出ないのですから。

そして今年も、来る十一月二十七～二十八日に二回目の研修道場を開催する予定であります。今後も続けて欲しいということなので、基本的な同じ内容の話を一度は全員に聞いておいて欲しいので、次回は初参加者を中心にしてもらうようにお願いしました。

次に研修参加者の感想文を紹介させていただきます。これは閉講式前に全員に書いてもらったものです。まず私の友人でもある社長の佐藤氏ですが、『以前より希望していた社員研修が、上人様のご努力で実現できたことを、非常に嬉しいことであり、感謝しております。日常の業務の中では、社員同士のコミュニケーションが限られ、仲間意識が薄いのが現状であります。しかし、チームワークが欠かせない当社の仕事、今回の研修で脱日常、脱仕事を少ない時間ではあったが味わい、講義の中から各自が自分なりに、己を見つめ直し、今後の社会生活に少しでも活かせれば、大成功だと思う。お陰様で、講義の内容も分かりやすく、押しつけでなく、ある程度の緊張感を持ってこの研修を受けられたこと、感謝しております。この研修が、当社の年中行事となり、社員の意識向上に役立つよう期待しております。』これが社長のものです。次の感想文は五十一歳の管理職の方です。『身延山という場所で、久しぶりにじっくりとお話をお聞きする時間を持てましたことは、自分にとりまして、大変貴重な体験でした。人としての基本を見つめ直す良い機会だったと思います。今後も社員研修という形ではありますが、仏教を通じて人間研修を続けさせていただければと思います。』次は三十四歳の管理職の方です。『親、祖父母が川崎のあるお寺さんに、熱心に信心をしているのを、小さな時からずっと見てきたので、仏教の教えとか、お経、お題目というものに馴れている、知っているという思いがありました。今回の研修で川名上人のお話を聞かせていただき、自分はまだまだ、何も知らない、知ろうとしていなかった自分に気がつきました。これを機に、自分を見つめ直し、会社でも家でも、少しずつ、

自分も周りも良くなるように頑張っていければと思ってます。』実はこの方が今年度から社長になり、友人の佐藤氏は会長になったそうです。続いて三十五歳の方です。『今回の研修で仏教についての講義は、普段聞くことが出来ない内容で大変興味深く聞きました。又、菩提梯や本山大本堂の朝勤参拝等今回の研修がなければ体験出来ないので研修に参加出来て良かったと思います。今回のような研修（修業）を社員で体験することによって、同じつらさを共有し、何となくではありますが、一体感の様なものを感じました。』他にも同じような内容があり、特に大本堂朝勤には新鮮な好印象を持ってくれているようでした。次に二十代の方お二人のものを紹介します。『縁がありまして、二日間だけでしたが、このような研修を受けられて、大変よかったです。今まで仏教にかかわる事がなく生きてきましたが、四回にわたって講義を受けさせてもらいましたが、これから生きていく上でとても貴重なことばかりで自分ではできるか不安です。一回自分をすててもう一度見直してみて、本当の自信を少しでももてたらと思っています。また講義で多くの教えを教わった事をこれから活かしておこうと思います。』つづいて『今まで仏教というものとほとんどと言ってよい程接点が無かった私ですが、とても良いお話を聞かせて頂いたと感じております。仏教の基本理念ひとつにしても今の自分にあてはまるような内容のお話でした。今まではどうしても自分の殻に入り込んでしまい、なかなかそれ以外の考え方というものを取り入れる事がなかったものですから「固定した考えはない」という考え方は今の自分を見つめ直すことができるお話でした。この考えをこれからの自分の生活に少しでも生かしていけるようにと考えております。』次の方は『私の実家は法華宗です』という書き出しではじまり、『研修の内容が全く聞かされておりませんでしたので、どのような研修なのか不安でした』と続きますが、感想としては『今の自分のスケールの小ささを発見することが出来たことは大きな収穫となりました。自分の出来ることを小さなことから実行し、家族、親、周りの方に、今の自分が存在していることの感謝の気持ちを忘れることなく今後の生活を送っていければと思います。』等と好意的なものでした。ただ、帰り際に『実は家族からは、謗法になるから参加するな』と言われていた

と聞かされ、驚くと同時に否定したことは、言うまでもありません。そしてこの方が今年の研修の担当責任者となっております。まだまだご紹介したいことがたくさんありますが、最後に入社二年目の二十三歳の方が『いくらやってもうまくいかない、なかなか覚えられないなど、日々できない自分にいらだっていたけど、今回の講習をうけて、少し楽になった気がします。』とあったことを紹介して、一応以上で社員研修の報告は終了させていただきます。

続いてプリントの四枚目、アンケート調査報告についてのお話をいたします。私が所属している現代社会ＰＪ（Ｃ）の今年度のテーマが、今社会は坊さんに何を求めているか、となったことを受けて、自分なりにアンケート調査を行おうと思い立ち、別紙の用紙を作り、一般社会の人々の意見を求めてみました。そのアンケート用紙も付いていると思うんですけども、要するにお坊さん、お寺にどんなイメージを持ってますか、どんなことを望んでますか、というようなことを、聞いてみました。これはあくまでも私の個人的な調査で、ＰＪとして今回の中央教研でやったものとは、項目の表現は違いますし、ＰＪでは参加希望の僧侶を対象にしましたけど、私のは一般の人たちにお願いしたアンケートでした。調査対象としては、いまご報告した社員研修をさせていただいた友人の会社の社員、これは不参加者も含む全員が書いてくれました。それから高校時代の友人の関係者、それから、私の妻のお華やお茶の教室の仲間、また隣の寺の奥さんの仕事仲間、地元の友人などから、五十ほど集まりました。年代はプリントにありますように二十代から六十代以上まで広くいただくことができました。各設問については、お寺はどんな所と思っていますかでは、だいたい想定範囲内の答えが返ってきたんですけども、三十代の男性は、心を浄める所、また同じように三十代の男性が、恐い所、暗い所、寂しい所、と書いてあったのは少々意外な感じがしました。次の、お寺がどんなだったらいいと思いますか、という問いかけに対しては、全世代共通の認識として、もっと気楽に行けるようにして欲しい、敷居が高い、というようなことが書いてありました。ただ一人、男性の意見で、年は分からなかったんですけども、無理して変わっても違和感がある、今のままでいいんじゃないかという意見もありました。お坊さんて何を

する人だと思ってますか、という次の問いかけには、これももう殆どは、お経を読んで、浄土、黄泉の国に導いてくれる、先祖を供養してくれる人、というような、当たり前の意見が大多数でしたけども、少数意見として、六十代の女性が、みんなの幸せを願っている人、という素晴らしい表現がありました。また四十代の女性が、過去から未来をつなぐ人、とありましたが、どういうイメージを持ってるのか直接聞いてみたいですね。一方、五十代男性の厳しい意見として、形式的にお経を読んでお布施を貰って去っていく人、とありました。恐らく棚経の様子をこの人はそういう風に見てたんではないでしょうか。次の、お坊さんにしてもらいたいことってありますか、これには、やはり圧倒的に相談に乗って欲しいという意見が多くありました。その中には、自分の跡取りのないお墓をどうしたらいいかという具体的なものもありました。最後に、坊さんに何か言いたいことありませんか、というのには、もうこれも予想通り、費用が高い、お寺にお金がかかりすぎる、お布施を全国統一にしろなんて意見もありましたけども、できない相談ですけども。そのほか具体的な表現として、子供に負担がかからないようにしたい、とか、それから私的な経費と公的な経費との区別ができてるんですかという問いかけがありました。やはりまだ坊主丸儲けという印象は皆さん持っているようです。地獄の沙汰も金次第と感じるというのもありました。また一方、公共の場としての開放を望む意見が多く、現時点では近寄りがたいイメージが定着しているようにも思われます。ただ、これは今回は私的調査であり、回答者のほとんどが直接、間接に、私とのつながりを意識してのものであるので、本音は隠されてる面もあるとは思われますが、その反面、真面目に考え回答してくれていることは確かであります。しかし私が今回の調査で感じましたのは、お寺を開放して欲しいとか、気楽に行けるようにして欲しい、相談に乗って欲しい、仏教について教えて欲しい、というような意見は、問いかけに対して何か答えを出さなくてはということで書いてくれたのであって、では、お寺がこういう風にしたからいらっしゃいよ、毎週一回お経や仏教の話をするからいらっしゃいよ、と言ってもほとんどは来ないと思うんですね。やはり、彼らにとっての優先順位では日常の中で、お寺の存在は非常に

後回しになっているのです。それともう一つは、やはり仲間の坊さんとも話したんですけど、例えば相談事にしても、公的、私的にいろいろな形で勉強会がありますし、弁護士さんのような専門職もあり、あるいは、いじめの相談などでは二十四時間体制で、それぞれの専門家がいろいろなメディアですでにやってるわけですね。誰でも行けるものがあるわけです。そうすると、困ったときに「お寺」というイメージの前に、このことだったら、こういう所へ行けばいいと、完全にとはいいませんが、もう今の社会の中にできあがっているのです。そうなるとお坊さんは、それらをトータル的に判断する、介護の世界でいうケースワーカーのような、そういう力を期待されているのではないかとか感じております。しかしまた反面、こういう人たちの中で、新興宗教といわれているようなものには惹かれるケースは少なくないのですから、それは何なのかな、というのは、まだ私には結論が出せずにおりますが、今後も色々なことを試みたいと思っております。今回のアンケート調査をして、ここにもまとめておりますように、想定の範囲内の回答がほとんどでした。でも、それを実際ちゃんとした文字として見たということで、また違った印象を感じたのは想定外でした。現代のように寺との関わりが希薄になった人々が私たちに求めているのは、自分たちとは違った価値観、存在意義だと思います。便利で豊かになったいわれている中で、多くの人々は「生きにくい世の中」と感じているのではないでしょうか。その原因の一つとして、人々が行動するときの判断基準が乏しくなっていて、しかもその中で仏教思想を意識することはゼロに近く、そのことと現代の凶悪犯罪、自殺などの頻発と無関係ではないはずです。また、このような時代でも、その事態になれば必ず寺と向き合うのは、葬送と先祖供養です。そうであるならば、儀式としての葬儀、法要の意義と質を高め、それらに付随する様々な事柄を含め、私たちの取り組む姿勢を見直す必要があると痛感しております。

それでは最後にもう一枚のプリントです。「七夕飾りの願い事」となっています。これは、私が代務住職をつとめる法界寺というお寺のお祭りでのことです。「このお寺には大きな鬼子母神堂があり、往時には広く信仰の対象と

なっていたようである。毎年七月七日には鬼子母神大祭が行われ、この地域の最初の夏祭りとして、夜店への人出は甲府市の中心街での七夕より多いといわれるほどである。」ところがですね、夜店への人出はすごいのですが、出店場所と道路一本隔てた鬼子母神堂にはほとんどお参りがないのです。このお寺には檀家は一軒もないんです。この夏祭りは、長沢というこの地区には七百所帯ほどが、三十組ほどに分かれているんです。その各組から祭典委員が一人ずつ出て準備運営をおこなうもので地域の行事として定着してるのです。逆に言うと、お寺さんの行事じゃないんです。ですからお寺はほとんど仕事をしていませんでしたから全然お寺にお参りが来なかったのです。それで、私が代務住職となってから、役員さんたちと相談しながら色々工夫を始めましたら、少しずつお参りの人がふえてきました。そこで今年は七月七日なんだから、笹飾りを作って、それに短冊を用意して子供達に願い事を書いてもらおうということにしました。そうしましたら七本建てた笹が短冊で一杯になりました。そこで保育園や小学生の子供が書いてくれた願い事の内容をまとめてみましたのでご紹介します。まず定番の、将来の夢、何々になりたいというたぐいのものですが、これはケーキ屋さんというのがダントツでした。また今の子たちですから、パティシエなんて書いてありました。同じことだと思います。この夢が一番でした。そのほかでは、サッカー選手、看護婦さん、花屋さん、警察官などがあったんですけども、一つ意外だったのが、学校の先生というのが一つもなかった。保育園の先生というのが一つあっただけでした。このことからも、今置かれている先生の立場が見えてきます。勿論、お坊さんになりたいというのもなかったですけど。それと、プロ野球選手というのも一人しかいなかったんです。サッカー選手は多かったですけど、これも今の時代を反映してるんだなと感じました。それともう一つは、お金持ちになりたい、お金が欲しいというのが数多くありました。これも現代の世相に通じるのかなと思いましたが、このことを仲間に話しましたら、自分たちの子供のころもそうだったといわれましたが、ただお金とはっきり具体的に書くというのはどうなのかなと思うんですけども。また夢というより現実のこととしては、友達と仲良くなりたい、彼氏が欲しい、彼女が

欲しい、という交友に関するもの。あと習字がうまくなりたい、それから算盤、暗算がうまくなりたい、また水泳、マーチィングなどもあり、これは山梨の地域性が表れているのかも知れません。また幼稚園児に多かったのが、アニメの主人公になりたい、私なんか全然聞いても分からない、ボウケンジャーとかなんとかジャーっていう、ポットみたいな名前がいろいろ出てました。あと意外に感じましたのは、幸せになりたいとか、お父さんお母さんが幸せでありますようにとか、そういう表現が多く見られ、さらには、健康でありますようというのも多くありました。中には、今年も死にませんように、と書いてあったのには驚きました。これらは、微笑ましいと言えば言えないこともないかもしれませんが、でも自分の子供の頃を考えて、自分が小学生の頃に、幸せになりたいとか、お父さんお母さんが幸せになって欲しいとか、健康でいたいとかなんて、考えなかったと思うんです。何がやりたいじゃなくて、ただ漠然と幸せになりたい、お金が欲しい、健康でいたい、という子供たちの表現は、大人たちが抱えている不安が映し出されているのではないのでしょうか。健康でいたいっていうのは逆に、病気したらおしまいだぞ、というような不安が、子供の中にもあるんじゃないのかな、まあ子供は大人の言う通りにはしないが、大人のする通りにするという、それが証明されてるのかな、そんな風に感じました。

それでも、ほとんどがはじめての鬼子母神へのお参りで、お堂へ上がった後の子供の履き物を、役員さんがそろえてあげていたり、高学年の子供には自分でそろえて脱ぐように注意をしている様子はほほえましく、これまで当たり前に続いていたことの重要さを感じ、大きなイベントもよいが、このような手作りの催しにより、地域の老若男女のふれあいの場として、お寺の存在価値は充分にあるものと再認識しました。少々時間を過ぎてしまいましたが、これで私の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。